



# 千の朝

黒野 ている

すぐに追いつきたいと思ってても

追いつけない

夢の中みたいに

息苦しい

ひとつふたつ数を数えて

喉に消える

いつもの奴

もう

大丈夫

人の数だけ いくつもの朝がきて

人とともに夜は戻って来る

「おはよ 眠れた？」

「ああ、おはよ。ん～ ぼちぼちねー」

「そおか、はやく落ち着くといんだけどね」  
自転車に乗ったサキが校門に消えてゆく。  
まだ時間に余裕はあるが、ぼくの足どりは重い。

駐輪場からサキが走ってきた。

「今日は体育休みよ。代わりに美術の自習だって」

体育なら 元々受けるつもりはない。  
美術なら 鉛筆一本あれば間が持つだろう。

「サキ、ありがと」

「うん、じゃあね」

生徒会の役員をしているサキは、そのまま職員室へ向かう。  
ぼくは教室へと いつもの足取り。

「千鳥、おはよー。今日体育ないって」  
僕に気遣う体育委員の匂也。

「サキに聞いたよ。ありがとな」

「あいかわらず情報速いな。」

季節で変わる体調が、僕の行動を妨げる。  
授業なんて どのくらい休んだんだろう。  
先生も仕方ないと思うのか、なにも言わなくなった。

勉強なら家でもできるけれど、僕はこの空間にいたい。  
自分が誰なのか忘れてしまいそうで、失った時間すら忘れそうで。  
すっかり知らないページに意識が跳んでいても  
浦島太郎になろうとも・・・

予想通り、美術の自習はデッサンだった。  
厚手の四つ切画用紙1枚、自由課題。画材も自由。  
自由っていっても急だったんで美術部以外は画材など用意していないだろう。

描きたいものならいくらでもあるが、点数をもらうための描き方がある。  
先生によっては ものの観点がまったく違うから、生徒は迷惑だ。

誰にでも共感されるように描け、といわれるか  
自分だけの線を引け、といわれるか。  
どちらも 今の僕には迷惑だ。

描けといわれて描いたものを評価される。  
どんだけ安い感性！  
チラシのウラで充分だ。

写実も抽象も、そうしようとして描くものではない。  
描いたら あとでジャンルに分けられた、それだけのこと。

画材だってそうだ。  
今急に頭の中に浮かんだものを、あれで描きたい。  
それだけのこと。

なぜ急ぐ

何を急ぐの

6Bの鉛筆を大事に削る瞬間とか  
パステルが指にからみつく触感とか  
油彩のオイルの匂いまで こっちは楽しんでるんだ。

それはたとえばさ、

『これから1時間 君たちはパチンコしてらっしゃい。  
出た玉の数で5段階評価します。』

・・・ほら やってらんねーだろ？

左手はすでに動き出している。  
スピードの乗った曲線が紙に躍る。

今年のセンセイは有名な美大を出ていらっしゃる。  
変わったモン好きだよな。  
人の顔気にして描いてロクなものにならないけど  
今は・・・ちょこっと点数欲しい。

斜に構えたギリシャ神話の石膏像描いとくか  
ほんとに描きたいのは そんなもんじゃないけど

「すごいね、千鳥。もうそこまで描いてんの」

サキの声がする。僕は手を止めずに返事をする。

「あー、サキの顔でも描けばよかったな」

「いーよ、今度で」

モデルするからモデル料ちょうだい、と言って声が遠ざかる。

現実に追いつける 唯一の時間。

ここにいないと

僕はいつまでも過去のままなのかもしれない。

ひたすら絵を描きたいときがある。  
夜が朝になり、やがて日暮れる。

身体は眠りを欲しがすが  
いま眠ってしまうのは惜しい緊張感。  
で、またダウン。

繰り返す日常。

学校続けられるかな。  
続けても、この先は・・・

絵で暮らして行けるほど柔軟じゃない。

また  
一つ二つ  
助けを借りる・・・

学校行けるかな。

・・・今日ハイケソウニナイ

しばらく時間の感覚がなくてメールで正気に戻る。

『 千鳥～生きてるか一☆ 』

サキだ

『 学年発表会の演劇の

舞台美術タノム (>人<;) 』

「舞台美術って...大道具？」

『 それー！(((o(\*°▽°\*)o))) 』

「大工仕事出来ないよ  
大まかな設計と絵を描くのだけでもいいか？」

『 おk☆♪ 』

「話は？書くの？」

『 今からそっち行く 』

マジかよ...

めまいがするカラダに無理をさせて、慌てて顔を洗って着替える。  
画材を片付け、描きかけのキャンバスを隠す。  
まだ乾ききっていない油絵具に触らないよう、そっと布を被せた。

すぐにサキがやってきた。



「ずっと描いてたの？」

「いや、そうでもない」

「嘘、乾いてないオイルの匂いがするもん」

幾つか床に落ちている、使いさしの油絵具のチューブを拾いながら、サキはスケッチブックを広げる。

「話はね、」

「うん」

「これから書くの」

「はあ・・・」

「初めに絵を描いてほしいの」

「はあ？」

「あの一、最後の晚餐みたいなの。今風に」

いまふう・・・

**「無理無理無理！」**

コピー無理だから！

「そんなムズいこと考えなくても。イメージだからさ、好きに描けばいいよ」

「好きな最後の晚餐を描けばいいのか？夜マックとか？」

サキが手を止めてこちらを睨む。

「なんていうか、荘厳なの。わあって圧倒されそうなヤツ頼む」

溶剤系の接着剤使わないよう、サキに伝えた。

そんなの吸ったらカンタンに倒れるからさ。塗料はアクリルならいい。

話をしながら メモを取るサキの肩の線を見ていた。

石膏像にはない、柔らかみのない骨格。

ずっと西洋のものばかりデッサンしてきたから、新鮮な気がする。

この前はモデル料なんて言ってたけど、ホントに描かせてくれるかな？

「じゃあ、大道具揃ったら教えるわ。来られるときに描けばいいからね」

立ち上がって 部屋を出るときの脚のライン。

「どこ見てんのよ！」

怒った時の眼の光。

「いや、絵の具踏んでないかって」

「えっ！」

膝をまげて足の裏を見るときにスカートの中まで見えたけど、黙ってた。

「ついてなかった？良かった」

「もうびっくりしたあ。んじゃね」

「ああ、気をつけてな」

この家のものではない、階段を降りる足音。

さて どう描こうかな？

最後の晚餐？それとも...サキ？

僕は再びベッドに横たわる。

んー、降臨したほうからだな。

描いては 消す。

塗りつぶす。

中途半端なテンションでは描けない・・・

『こういうイメージ』

自分の心の中を描くことはあっても、  
ひとの心にあるものを描くということは はじめてだ。

最後の晚餐・・・目の前にあるように 細部まで思い出せる。

だから

描けない

「おはよ、千鳥元気ー？」

「おはよ」

学校近くでサキの自転車が止まる。

「どう？構想練ってる？」

「あの・・・先に話書かない？」

「うん、考えてるのはいくつかあるよ」

サキは指を折って数える。

「なんか 最後の晚餐にひっかかっちゃってさ」

「あー、イメージでいいのに」

好きなものって そんな簡単にイメージに昇華できないよ。

そんなこんなで数日が過ぎた。

僕は 描きかけだったキャンバスを引っ張り出していた。

ギリシャ神話でもなく、日本人でもない。

でも美しいものって描けるんだろうか。

もう ひとにどうこう言われたいものを描きたい。

何を描いたんだ、とか

なぜこの色なのか、とかもう聞かないで。

このキャンバスに自分をぶつける

赤は赤 青は青

なのに

キャンバスの上で

自在に変わる

用意されたものではない

今ここにあるもの

ひと通り描いて 横たわる。

知らないうちにメールを受信していた。  
サキからだ。

『 みんなで脚本決めたよ

絵はストーリーと絡めないから

自由に描いてv(^-^)v』

さっき描いてた絵の余韻があるから  
なにも思い浮かばないけど 少しラクになった。

で なんとなく 外へ出たくなり・・・

厚着をしてドアを開けた。  
思ったよりも冷たい風に首をすくめる。  
今夜は星がきれいだろうな。

行く当てもなく歩き出すと  
ひとりで散歩している犬に出くわす

犬が言う

おい こんな寒いのにどこ行くんだ

僕は言う

ちょっとそこまで 明日を買いに

犬： 気をつけろよ 間違っただ昨日をかうんじゃないぞ

僕： わかってる 昨日のなら匂いでわかるさ

犬と僕は 立ち分かれる

木枯らしが僕の中に入ってきて

冷たい笑みを浮かべる

ようこそ 冬の女王

僕の身をふるわせると

枯葉を舞い散らして また空へと駆け上る

薄暗い空に

ひとつふたつ星が

ゆるいカーブの線路を 踏切から見渡す

先がどこへつながるのか 知りたい

カーブ・・・

ふと

サキの肩のラインを思い出す

今 描いてみたい



線の強弱

リズム

明暗

色調

そんなこと考えてたら進まない

下絵は 数分で終わる

描きたいときなんて そんなもん

あえて無理な色ももってくる

不協和音にはスピードがある

バランスでいい調味料になる

光

そうだ

もし考えるとしたら

光

肌の色 髪の色 陰翳

いちばん楽しいとき・・・

サキは

どんなとき楽しいと思うの

下絵のサキは

視線を外して 表情はない

次は サキの楽しそうな顔を

次があれば・・・

下塗りを一通り終えて 眠りにつく僕に

もう 鳥の声が聞こえる。

また 今日も学校に行けない。

目が覚めると 夕方だった。

キッチンへ降りていくと 母と誰かの話し声がする。

「あ、起きたの。サキちゃん来てるよ」

「千鳥 おはよう。眠ってるみたいだったから、待ってた」

まだはっきり目覚めていない頭に

サキの笑顔がぼんやりと映る。

「え？」

「メールしたのに。でも寝てたらわかんないよね」

サキは そういつて紙束を僕に差し出した。

「なに・・・」

「台本。出来た！」

「あ・・・そう」

「あれ？反応ウスイね。徹夜でがんばったのに」

「サキも徹夜したの？」

「したさ～！練習の日がなくなっちゃう」

「そっか」

紙束をめくる。

登場人物と書き割り。

配役。

スタッフ。

そこまで見て、目を離した。

「あとで読むわ。めまいする」

「大丈夫なの？」

「まだ頭が起きてない」

母は サキに夕飯をすすめる。

「サキちゃん、食べていきなさい。お母さん、遅いでしょ」

「いいんですか～？うれしい！」

サキの家は父さんがいない。兄弟もいない。

いつからかは知らないが、小学生の頃、同じクラスになったときにはもう母子家庭だった。  
学校から帰っても母さんが仕事から帰るまで、サキは一人だ。  
その頃から元気とはいえない僕のために、サキは連絡帳やプリントを届けてくれた。

「千鳥も もう食べられるでしょ？一緒に食べなさい」

起きてしばらくは 水さえ喉を通らない。  
でも丸一日何も食べていなかった身体に なにか入れなければ。  
目の前に食器と箸が置かれる。

「千鳥さあ・・・絵の具食べて生きてんの？」

「そんなもんかもな」

「あの絵」

僕は箸を落としそうになった。

「ど、どの絵？」

「今 描きかけのお」

見られた!?

「ア、アレ・・・な、なに？」

箸を持ち直して知らん顔する。

サキがニヤつきながら、かぼちゃの炊いたのに箸をさした。  
いつもなら「お行儀悪い！」って指導入れるところだけど・・・

まだそんなに細かく描いてないのに？

「あれ、誰よ～？」

サキが僕の知らないカタカナを口にする。

「なに それ」

かぼちゃごと落ちた箸が 僕の足元までころがってきた。

「ああもう、だから箸さすなって！」

「 な に っ て ？・・・なにしてなによ」

「だって 聞いたことないし」

「嘘お」

「なにその顔？」

「いいよ 隠さなくても」

誰でも知っているらしいそのグループのメンバーから、サキはいくつか名前を挙げたけど・・・  
ほんとに知らないんだけど？

「じゃあ 誰よ。リアルすぎる。てか エロい」

「へっ？」

「千鳥 あの絵のモデルの子、好きでしょ～？」

「なんで？まだまだ下塗りしただけだろ？エロいってどういうことだよ」

「そう感じたもん。石膏像の絵と違うもん」

おお神よ この迷える子羊に なにか救いの言葉を！

中世の教会の入り口

薄暗く小さなドアをひらく

色のない世界

祭壇に向かって歩くと ぽっかりと陽の光が入る

ステンドグラスの色だけが

その世界での いのち

いくつもの生と死

融合と離別

最期の・・・

B全の大きさのパネル2枚にそんな絵を描いた。

ふう、とため息をつく。

舞台の上だからくっきりと見えるように  
マリア様をまんやかに。

天に召されるその日まで  
僕は絵を描き続けるだろう。

それまで マリア様

そこにいて見守ってください。

まさか マリア様にまで「エロい」って言わないだろうな・・・

サキにメールをうつ。

「描けた 明日持っていく」

『 やったー ㄥ(°▽°\*)ノ☆ 手伝おうか? 』

「天気さえよければ大丈夫！」

『 了解(´・ω・`)ゞ

よくがんばった♪ (\*^ 3^ )ノ〰☆ 』

脱力・・・

なんだよ ひとに「エロい」とか言っというて。

今日はまだダルさがない。ポスターカラーだとラクなのかもしれない。  
あの絵の続きでもやるか。

油彩のキャンバスを取り出す。

白く浮き出た少女は まだ表情のない顔で 僕を待つ。

どんな表情にしたいの？

少し笑ってみようか

ほんとうは最後に入れる筆で 線をなぞる。



こんな顔で笑ったり 泣いたり。

びっくりした顔と 怒った顔は 宝物だ。

こころの底まで見える瞬間。

僕の1年は 普通の高校生の半分に近い。

小学校・中学校・高校。

サキと出会う朝は1000日あっただろうか

あつたとしたら

サキの千の顔を 僕は見たことになるんだろうか。

ざわめきが 静まりかえる

一瞬の 幕開け

この瞬間が

イチバンキライナトキ

評価するな

してもいいけど 口にするな

「・・・すごい」

やっと サキが口を開く。

「すごいよ、千鳥。これ、もったいないくらい」

僕は肘をついてずっとよそをみている。

「舞台終わったら 捨てていっから」

「待て待て！ 捨てられないよ！」

「いって いらない」

自分で描きたいものでなければ いらぬ。  
おほめのことばも 批評も なにもいらぬ。  
そんなの 自分の絵じゃない。

「欲しけりゃ持ってけば」

サキは聞いていなかった。  
ただ マリア様をじっと見ている。  
「その マリア様も エロいのか？」

「ちがう」

「なにが？」

「これは なんともないの。これはあ、ただのマリア様なの」

ただのってことないけど・・・と言ひ直す。

「でも、この前のは、あれはダメ。なにか感じるものがある」

「なに言っただ」

「だってそう思ったもん」

「あれからだいが塗ったぜ、もうあとかたないよ」

言っただから しまったと思っただが、もう遅い・・・

「見たい！今日 千鳥ん家行くっ！」

「今日 練習あるんだろ」

「私いなくてもいいもん。あの絵が見たい」

見せたくない・・・

「あ、今日病院行く日だった」

「うそっ！じゃあ私もついてく！」

「・・・なんで？」

「絵が出来ていくところ 見たい」

ちえっ・・・

「好きにしろ」

「やったー♪」

「絵なんて 今まで見てるじゃん。なんでいまさら見たいの」

「わかんないけど」

サキは まだマリア様を見ていた。

「みておかなくちゃって そう言うの」

「誰が」

「わたしの知らない だれかが」

冗談とも思えない表情

「キモチわりい・・・」

「千鳥、来年どうする？」

「進路？」

「そう」

その前に 学年あがれるかどうか。

「多分 日にち足りない」

「なんとかなるって。保健室登校アリでしょ？」

学校に来ること。何のために・・・

居場所を求めているだけ、か。

そう思うと ここじゃなくてもいいのかなとも思う。

「上がれなかったら やめるかなあ」

「ダメ！やめちゃダメだよ！卒業しようよ！」

卒業 できるんだろか？

「美大とか、いけるじゃん！千鳥の絵ならいけるよ」

「絵だけじゃダメなんだよ」

「私大なら？特待で」

「がんばる気がない」

「もったいなあ〜い」

そうかな

絵なんて いつでも描けるし

がんばって身体壊したくないよ

もう これ以上

僕についてきたサキは  
階段を上がる頃には  
もう ひとつもしゃべらなかつた。

ドアを開けて サキを部屋へ入れた。  
隠しようもないから 描きかけの絵はそのまま・・・

パレットもオイルもそのまま  
乾きかけた絵の具が 鈍く光りながらそこにある。

僕もしばらく黙ったままで  
サキの後姿を見ている。

わらってる・・・

その声でふと我にかえった。

「わらってるの、このひと」

サキがふりむいて言う。

「ああ そうだよ、少し表情いれたよ」  
なんだか顔が赤い気がして・・・？

「どした？」

いいなあ・・・

かすかに そう聞こえたような気がした。

「え」

僕はもう一度サキの顔を見なおすと  
紅くそまった頬に 光るものが・・・

なんで

「なんでもないっ！」

サキは無理やり涙をふくと、  
「千鳥、ありがと」と言って階段を下りていった。

なんで？

泣くほど この絵って変か？

しばらく呆然とそこに立ちすくむ。

夕暮れは 窓の外で色を変え  
音もなく夜の闇に沈む。

「千鳥、いたの」

母が入ってきたことも知らず、  
僕は明かりのない部屋に立っていた。

「電気もつけずに。これ、玄関に落ちてたけど」

サキのマフラー・・・

「サキちゃん きてたの」



「すぐ帰ったから」

「これ 届けてあげたら？あの子自転車でしょう、明日も寒いし」

気が進まない・・・

「あまり忘れ物なんかする子じゃないのにね」

「母さん、これ・・・変かな」

「えっ？」

「この 絵」

部屋の明かりをつける。

「変って・・・ああ、どうかしたの？」

「あいつ、この前来たときにこの絵がエロいって。また色塗ったって言ったら今日見たいって」

「・・・そしたら？」

「ずっと黙っててさ、いいなあって言ったかと思ったら・・・」

「あ、泣かしたの～？」

「泣かしてないって！ あいつ勝手に」

「しょうがないなあ、ほら、これ届けておいで」

マフラーが差し出される。

僕は手を出さない。

「行きたくないよ」

「別に悪いことしたんじゃないよ、いいでしょ？」

「そうだけど」

あやまることでもないし、なんて言えばいいのかすら思いつかないよ。

「描けないところがあるからモデルになって、って言えばいいのよ」

「どういうこと？」

「サキちゃん、あなたが違う女の子描いたと思ってるよ」

「へ？」

「千鳥に描いてほしかったのよ」

「なにを」

母は困ったような顔をする。

「あなた これ誰を描いたの？」

「あ」

わかった！そういうことか！

「そゆこと」

満足そうな勝ち誇ったような顔だな。

でも そういうことか。

それなら サキにあやまろう・・・ってか

あやまるほどのことでもないよな。

じゃあ なんで泣くの？

なんで・・・

「サキに似てないってこと？これ」

目の前が サーモンピンクに染まる。

「ばっか！・・・もういいから 早くマフラー届けておいで！」

なんで おこってんの？

そんなことより

サキの言った「しらないだれか」が気になってしょうがないのに。

どこか甘い香りのする

サキのサーモンピンクのマフラーを持って

コートとマフラーと手袋と・・・完全装備で

すっかり暗くなった道をサキの家まで歩く。

風はないけど、夜は切れるほど冷たい。

サキの家の門灯が見えた。

ピンポン押そうとしたら 中から声が聞こえた。

言い争うような？けんか・・・？

いきなりドアがあいて、僕はふっとばされた。

出てきたのは サキだった。

僕に気づかず、走っていく。

「サキ！」

「・・・千鳥？」

「どうしたの」

「てか なんで？なんでいるの？」

僕は甘い香りがするマフラーを差し出した。

「忘れ物」

「あ」

サキは 受け取らない。

「ほら」

まだ サキは手を出さない。

「サキ、ごめん。あの絵さ」

暗くて よくみえないけど  
鼻をすする音で泣いてるんだとわかる。

「描き直すから・・・だから今度は」

「ひとりい・・・」

声になってない声で 僕の名を呼ぶ。

「お母さ・・・けんかしちゃっ・・・」  
やっとそれだけ言うと、声を上げて泣いた。

「なんでけんかになったの」

「・・・しんろ」

「話が合わないの？」

「あたし・・・家へ戻りたくない。千鳥の家へ行きたい」

ますます冷えてきた上に、サキは上着も着ていなかった。

僕は サキにマフラーを巻いてやった。

「ちどりい、どっか行かないで。ずっといっしょにいてえ」

サキの髪からおぼえのある香り。

ああ この香りがマフラーに移ってたのか。

「あたし、お母さんしかいないのに・・・わかってほしいのに。

もう 寂しいのイヤだよお」

ふいに

サキの存在がすごく悲しくなった。

「あら、どうしたの。一緒に帰ってきちゃったの？」

母はサキが泣いてるのを知らんふりしてる。

「母さん、サキのうちに電話いれといて。進路のことでケンカしたんだって。心配するといけな  
いからさ」

「わかった。後であったかいもの持ってくわ」

ストーブつけなさいよ、と階段の下から言う。

そんなことわかってるけど・・・心配なんだろうな。

年代物の大きなガスストーブは、火を付けるとふわんと独特の匂いがする。

喉の弱い僕は、エアコンも灯油のファンヒーターもダメで、唯一このガスストーブだけが使える  
暖房器具だった。

みるみるうちに部屋がオレンジ色に暖まってゆく。

サキにはフリースの上着をかけてやるが、まだぼんやりと何処かを見つめて立っている。

「座れば」

ストーブのそばにクッションを置いた。

サキは静かに腰を下ろす。

ついでにティッシュの箱も渡す。

4、5枚ひっぱり出して顔をぬぐうと、少し落ち着いたようだ。

「私の家ね お父さんいないでしょ？幼稚園の頃、ある日突然 いなくなっちゃったの。

大好きな大好きなお父さんだったのに、何があったか知らないけれど、私とお母さんを置いて出て行ってしまった。

いつまで待ってもお父さん帰って来ない。

きっと明日は、って毎晩お母さんに言いながら寝ていたの。

でも だんだん言っても無駄なんだなとわかってきて、いつからか口にださなくなった。

お父さんはいないもの...いまではそういう家なの。

でも、進路のことで、私は推薦で行きたい学校があって、そこは厳しいところで」

そこでサキは言葉を閉ざした。

またいくつかの涙がつたう。

「両親そろってないと、ダメなんだって。それで、私お母さんに聞いたの。

お父さんは生きてるの？今どこにいるの？

私の受験の時だけ 面接の時だけ 来てくれないかなあって。

そしたらお母さんひとこと、違う学校を探しなさいって。

でも 私にはその学校しか行く道がないの。

将来何になりたいかも話した。今の収入では、無理だっていうことも知ってる。



先生もいろいろ考えてくれて...

うまく枠に入れれば、免除になることもあるの。

お父さんさえいてくれれば、もしかしたら行けるかも知れないのよ。

でもおかあさん、それはできないって。

私のために一日だけきてもらうことはできないの？

私、なにか悪いことした？

お父さんがいないだけで、なにも他の家と変わらないのに...なんで...」

ストーブは静かに燃えている。

そのかたわらで 僕は...

体調が悪いのを盾に、人生なめきって毎日甘えた生き方している。

サキがこの家の子なら、なにも問題なかったのに。

ニートにならざるを得ない、僕のこれからの人生と、サキの人生を取り替えてやりたかった。  
サキのお母さんに即却下されるだろうけどな。

「私、どうすればいいんだろう。もう時間がないよ。

お父さんがどこにいるかもわからないし、私が頼みに行くのも無理だし。

お母さんともケンカしちゃったし」

唯一の親と 唯一の子。

外れることのない堅い絆だが

どこにも逃げ場のない、哀しい関係。

「お母さんと二人になりたくないよ」

サキの肩が、細かく震える。

「千鳥、今日ここに泊めて」

「ここで座ってるから、静かにしてるから、一晩考えさせて」

泣きじゃくるサキを オレンジの炎が照らしている。

僕はどうすることもできず、ただ哀しみの塊となったサキを黙って見ているしかなかった。

しばらくして、母が暖かいココアを持ってきた。

「母さん、サキ 泊まらせていい？」

「えっ？」

...そりゃびっくりするだろうな  
僕が今までのことを話した。

「サキちゃん、さっきお母さんに電話したらね、お母さん心配してたよ。  
ここだってわかったら ホットしたって。  
今日はうちにいていいから、落ち着いたらお母さんともう一度お話ししたら？  
お母さんもお話したいことがあるみたいよ」  
「でも・・・話をしたってダメっていわれるだけだもの」

「お母さんもいろいろ考えてのことだったみたいよ。  
サキちゃんのことを思ってしたことだってたくさんあると思う。  
お母さんともう一度ゆっくり話して、それから先生とも話して、結論だすのがいいと思うわ」

「サキのお父さんの居場所を知ってる人はいるの？」

母は その僕の言葉を目で制した。

「お母さんを憎まないで。お母さん、最初から話してくださると思うから」

黙ったままで サキは反抗を示していた。

母は サキの頭をなでながら言った。

「サキちゃん、疲れたでしょ。お風呂はいっておいで。そのあとでご飯一緒に食べよ」

サキはしずかに階段を降りていった。

「母さん、サキのお父さんて知ってるの？」

「じつはさっきね、サキちゃんのお母さんがみえたの。うちに泊ませるかもって言ったら、着替えを持って」

話早え・・・

「近所だし、小さい頃から知ってるもん」

サキのお父さんは、行方不明だということになっている。

「でもね、サキちゃんのお母さんは、亡くなったって思ってるの。

どこかで生きてるなんてありえないって。

だけどそんなことサキちゃんに言えない」

「本当に・・・？本当に死んじゃったってこと？」

「はっきりはしないのよ。仲が悪かったわけでもないし、それしか考えられないって」

「今から捜すこともできないの？」

「わざわざ捜すのは大変よね。警察にいったところで、事件でもなければそんな10年以上も前の話」

「なんとかなんないかなあ」

「サキちゃんとお母さんで決めるしかないわねえ」

サキちゃんお風呂上がったら、ご飯にするから。

そう言って、母は下へ降りていった。

哀しい塊の居場所を作るために、僕は部屋を片づけ始めた。

描きかけのドローイング、パネル、イーゼル...

すべて親に買ってもらったものばかりだ。

父さんが働いて、母さんも仕事に行って、僕の入院代とか薬代とか

普通の子ども以上に僕にたくさんのお金を使って...

ろくに通ってない学校とか、使いもしない教材とかのたぐい。

画材だって好きなように使ってる。

できたものに何の価値もないのに。

サキだけが哀しいのじゃなく、誰もが哀しさをひそめて生きてる。

僕のなかでいつ終わるかもしれない人生と、もがきながらも進み続けるサキの人生とが  
交わることもなくどこかですれ違っていくような、そんな気がした。

このまま時間が止まる、なんてこと

今までにないのに

なぜ僕たちはいとも簡単に

時の隙間にはまってしまおうのだろう

畏かもしれない

自分で自分を嵌める畏

「千鳥...」

「なに？」

「変なことするんじゃないわよ」

「...母さん、何考えてるの？」

やっぱりそういう目で見える？

いや、そういう状況じゃ、ないよね？

サキの母さんが着替えを届けてくれたって聞いて、サキはまたひとしきり泣いて。

夜中起きてるのは得意だし、明日は休みだし、朝までつきあうけどさ。

変なことって。

期待してんの？サイテー！

僕がお風呂からでて二階へあがると、暖まった部屋にサキの姿があった。

サキは僕の描きかけのあの絵を見ていた。

それ、サキを描いたんだぜ

そう言おうとしたが、口は思うように動かない。

なんか変なシチュエーション...

「ね、千鳥はさ、絵を描くとき何考えてんの」

考えてる？なにも考えてないさ。

「考えるんじゃない、ここから出てくるものをぶつけるだけだ」

「私には なにも出てこないよ。私になくて千鳥にあるものってなあに？」

サキになくて僕にあるもの？

何だろ？あるとしたら...

「サキは健康だし、何でも出来るから、絵じゃなくても自分を表現できるだろ？」

「そんなことなのかなあ、天は二物を与えずって？」

「絵は言葉と同じなんだよ。上手い下手じゃなくて、表現のひとつの手段。

英語の通じる人、日本語の通じる人。

歌で伝える人、踊りで伝える人。

同じ言語を持った人にしか伝わらない」

「綺麗な絵を描く人も、わけわかんない絵を描く人も、みんな言葉が違うってこと？

ときにはややこしいことや汚いことだって表現したいよね。楽しいことばかりじゃあないもんね」

そう

自分のなかにあるものを

自分がきたないと思えば

人の同じ部分もきたなくみえる

それも必要不可欠だと信じ、

自分のこと100%肯定できれば

つまり、きたないと思わなければ

人もきたなく見えないんだよ

人のイヤなところは 自分のイヤなところ

目の当たりに見せつけられるから

痛くもない腹を探られたようで気分悪いけど

自分にもあって、人にもある部分だと認めれば

それで済むような気がする。

「僕が絵を描くのは、甘ったれでなにもできないけど、でも、心の中だか頭の中だかわからないどこかのメモリに入っている、何もかもをぶつきたい時なんだ。

綺麗なものだけを描きたいんじゃない。

綺麗な絵を描きたいわけでもない。

人目には綺麗だと思われる絵なんて薄っぺらだ。

ホントの綺麗さは、なかに秘めたものなんだよ。

だから、構図とか、色調とか、そんな定規に当てはめるような、そんなものでは綺麗さなんて決められないよ」

絵を見た人が、どこまで自身と向き合ってるか。

絵は心を伝える手段なんだよ。

だから、読み取る相手で見方が変わるのは当たり前で。

それを点数つけるだの、時間内に終われだの

抽象画を描けだの

おかしいよ

言葉はさ、言葉って...絵や音楽みたいに気持ちを伝える方法としての大きな意味での言葉のことだけど...



本心から出てこなくちゃ 何の意味もない。

目を閉じてたって 絵は見えるようになる。  
人間って そういう力、まだいっぱいあるんだよ。  
それを外から慌てて固めてしまったら...

どうやって気持ちを表すの。

表面的なものを見てわかったつもりで、またそれにわかったような返事をして、ずっと繰り返す？

時間のムダじゃない？

いつか ホントに中身がわかったときに、表面と違いすぎてショックじゃない？

くだらないことしてるより、心のどこかに同じように通じる言葉をみつけて、わかりあえたらもっとよくない？

そうなりたいよな、いつか。

サキの方を振り返ると、サキはもう目を閉じていた。

サキに布団をかけてやる。

「あの絵、サキのこと 描いたんだよ」  
知らずに口にしてしまった。

眠っているはずの サキのまぶたから新しい涙がこぼれた。

薄暗い灯りのなかで、僕はサキの頭をなでてやった。

サキの両手が僕の手をそうっと包み、  
その手の下でサキはずっと泣き続けていた。

冬の夜は長い。

きっと今頃はオリオンがカシオペアと話をしている頃だろう。

月が細ければ、流星も見えるのかもしれない。

サキの涙が乾くまで 僕は起きていようと思った。

これから一生のうちに 何枚の絵が描けるか知らないが  
いちばん気に入った絵だけを残して  
あとは処分してしまおう。

普通なら 何もかも残しておくのかもしれないが、  
僕の背負えるものは あまりに少ない。

ただ これを描けたという証になれば それでいい。

サキの寝息を確かめて 僕はそっと手を離れた。  
僕の左手は いつまでも温かかった。

その左手に筆を持つ。  
肌に差す赤みとシェイド。  
指先に光を集めて 絵筆を走らせる。

柔らかい笑みと 今にも跳ねだしそうな溜めたポーズ。

さっきまで泣いていたのとは違う、少し大人びたサキの表情。

いつかこんな日がくるのかな  
サキは僕を追い越していくのかな

今日みたいに 泣くのかな  
夜のあとには必ず朝が来るように

いつか来る 最後の日・・・

絵の中のサキが笑ったような気がした。  
目を合わせると そのままキャンバスから抜け出して  
僕の傍らにたたずむ。

おはよう もうじき夜が明けるよ  
抜け出してきていいの？  
朝日をあびたら 元にもどれなくなるのに

大人びたサキは なつかしそうに部屋の中を見渡す。

ベッドに眠る 少女の自分に近づくと  
耳元になにかささやき、僕のほうを見ると

もう 私は大丈夫だから、

と 微笑んで 消えた。

幻なのかな

でも眠ってるサキの顔は、泣き疲れた表情から穏やかさを取り戻している。

大きく伸びをして 絵を見ると、  
絵の中のサキは目を閉じていた。

昨日から少し疲れている。  
僕も少し眠ることにしよう。

また 数時間後にくる、すべてを優しく包みこむような朝のために。

- fin -

## 千の朝

<http://p.booklog.jp/book/48742>

著者：黒野 ている

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/naomur/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48742>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48742>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.